

あたりまえの日常の中に
あたたかさを感じられるまち



ありがとう

～3年間の採物暮らしの中で出会った人々～



2023.12 Sato Mai

はじめに・有壁について

有壁は、宮城県栗原市にある小さな地域です。宮城県と岩手県との県境にあり、JR有壁駅があります。

奥州街道の宿場町として栄え、江戸時代には参勤交代の宿に利用された有壁本陣が現在も残っている、数少ない旧宿場町のひとつ。地域の有志で月に二度、風通し作業を行っています。

萩野酒造・有壁わら工品といった伝統産業や、有壁の農業を守る取り組みをしている団体、奥州街道を守る活動をしている団体が存在し、有壁を大切に維持してきました。

奈良時代に創建された貴船神社や、鎌倉時代の伝統が残る熊口五輪塔などの歴史的建造物もあり、まちあるきも楽しめます。

人口減少に伴い学校は廃校となり、現在は小・中学生はスクールバスで統合された学校まで通っています。登校の際には、地域の見守り隊の方々が毎朝バスを見守ります。

駅や国道4号の近くに位置する有壁。どんな暮らしが、日常があるのか。ぜひ覗いてみてください。





来てくれてありがとうございます

「はいどうぞー!」と元気な声で迎えてくれるのは、有壁3区に住む阿部夫妻。自宅裏にある「熊口五輪塔」の管理や供養などを行い、この場所を大切に守り続けています。家の中からたくさんの資料を引っ張ってきては「これがね」と話を聞かせてくれる誠さん。歴史や文化財の話、飼っていた動物の話なども聞かせてくれました。

いつも笑顔で、つられてこちらまで笑顔になる明るさを持つ阿部夫妻。私も笑いすぎて、帰る頃には頬が痛くなるほど。私の祖母が入院した際に気にかけてくださり、退院の報告をすると「よかったねえ」と自分のことのように喜んでくださり、愛情の豊かさを感じました。



美味しいものを食べさせてくれるいち子さん。いつも私は孫気分です。



家の裏には、「熊口五輪塔」。草取りや供養など、大切に守り続けてきました。東北各地からはもちろん、九州の大学からも歴史や伝説、古文書に興味のある方が訪れるそう。

「いろいろな人を五輪塔に連れてきてくれてありがとう」「お粗末さまでした」常に感謝の気持ちを伝えてくださるおふたり。人に愛され、動物にも愛され、丁寧に生活を営んできたおふたりから、たくさんの愛情を受け取りました。

また「こんにちは!」と玄関を開け、手作りずんだ餅を食べにいきますね。帰りたいと思える場所があります。ありがとうございます。



阿部 誠

阿部 いち子



これからのお寺の
在り方を考えていきたい

観音寺の住職・菅原大樹さんと康子さん。観音寺は奥州三十三観音第21番札所で、807年に坂上田村麻呂によって開創されました。本堂の横の小道を登り、竹林を抜けていくと奥には秋葉神社があります。

気さくで親しみやすい菅原夫妻。私自身、お寺は敷居が高いイメージでしたが、おふたりとお話をする中で、お寺に愛着が湧くようになりました。

若者の寺離れ・墓終い・法要スタイルの変化が起こる中で、これからのお寺はどうあるべきか。「気軽に寺に来て、お話を聞かせてほしい」と話す菅原さん。未来を見据えて前向きに考えている様子が伝わります。



「研究所へようこそ！」有壁に虫博士がいました。



「虹だー！！」と指を差し走り出す姿を見て、何か大切なことを思い出した気がします。



息子の誠大くんは昆虫博士。カブトムシなどの昆虫を繁殖させ飼育しています。誠大くんは生き物の成長に触れ、親の大樹さんは住職として亡くなった方のご冥福を祈り続ける。生と死が共存する場所で、互いを尊重し、笑顔で楽しそうに会話を重ねる3人を見てみると、不思議と気持ちが和らぎます。

これからの観音寺がどうなっていくか楽しみです。



三浦良和

三浦清子



有壁1区に住む三浦夫妻。私が出会ったとき、良和さんは有壁1区の区長をしていました。

国鉄に勤務し、たくさんの人・社会を乗り物で支えてきた良和さん。趣味に全力を注げるよう、隣で見守ってきた清子さん。毎朝「見守り隊」の活動を続け、有壁の子ども達を温かく見守ってきました。全国各地を巡り、海外にも行ったことがある三浦夫妻。愛車のバイクのサイドカーに清子さんを乗せ、北海道や長野まで行った話は、羨ましく思いました。

人は支え、支えられて生きていく。私の人生はそんなものかも。



乗り物が大好きな良和さん。ガレージの中には歴代の愛車をまとめた写真がずらり。



「これから行きたい所は?」と聞くと「行きたいところは全部行けたし、悔いはないかな」と笑顔で話す三浦夫妻。いつも笑い合い、旅の思い出話をしているおふたりを見ていると、ホッとするような、あたたかいものに包まれるような感覚があるのです。自分の好きなことを大切な人と共有できる幸せをおふたりから感じます。



有壁の田園風景が広がる中、粋なエンジン音を奏でる赤いバイクを乗りこなす姿。

「いつか」と後回しにせず、見たい景色・出会いたいものに巡り会えるよう、一瞬一時を大切に生きていきたいと思いました。



商いは飽きない

北海道屋商店を営む佐藤さん親子。有壁にはスーパーがないため、ここは地域に住む人にとって欠かせない商店です。

有壁の酒蔵「萩野酒造」の地元販売指定の店ということもあり、萩の鶴・日輪田など地域のお酒がたくさん置いてあります。



佐藤 嘉代

佐藤 健彦

「北海道屋は本当に北海道から来たんだよ」と話す佐藤さん。協力隊として活動を始めて3年目でその事実を知りました。開拓時代に北海道に渡ったご先祖が、有壁に戻ってきてお店を開いたのだそう。また、母・嘉代さんも嫁いで来る前はデパートで働いており、もともと商売に興味と関心があったといいます。



萩野酒造などの日本酒はもちろん、珍しいウイスキーも。遠くから買いに来るウイスキーマニアもいる。

息子の健彦さんは5代目。そして今年で創業100周年。親子代々つないできました。時代の変化に合わせて、売る物も変わってきたようです。

以前は衣類・履き物・練炭・電気製品なども売るなんでも屋さんだったそう。今もその名残で衣類などが売られています。

きっと大変なことも多かったと思います。それでも「商いは飽きないだから」と笑って話す佐藤さん。

時代のニーズに応えつつも、地域に根ざしているところは変わらない。昔ながらの商店の雰囲気が、心落ち着く雰囲気につながっているのだと思います。





「ありかべぐらし」を作成した思い

「ありかべの日常を伝えたい」

そう思ったのが、このフリーペーパー作成のきっかけです。

有壁に移住し、協力隊として活動して2年が経った2023年春、3年の任期满まであと少し。卒業までに、私に何が出来るだろう、そして何がしたいだろう。そう考えていました。

そんなとき「野菜もってきな〜」「元気？」と声をかけてくれる地域の方々を思い出しました。観光PRやイベントも良いけれど有壁の暮らしにこそ、魅力が沢山詰まっている。私が移住を決めた1番の理由でもある、有壁に暮らす人々のあたたかさや素敵なお話を見える形で残したい。

そして、それを見た方が「有壁に住むとこんな人達や風景と出会えるんだな」と感じて欲しい。私が、2年半で出会えたご縁だからこそ、表現できる言葉で残したい。そう思い、「ありかべぐらし」を作成しました。

ありかべの、ありのままの日常の、あたたかさが、伝わりますように。



栗原市金成 有壁へのアクセス



新幹線

くりこま高原駅	車で約25分	有壁
一ノ関駅	車で約13分 (市民バスあり)	

電車 (JR東北本線)

仙台駅	約1時間25分	有壁駅
一ノ関駅	約6分	

自動車 (東北自動車道を使用)

仙台宮城 IC	約45分	若柳金成 IC	約15分	有壁
---------	------	---------	------	----

心に残る風景があるから

形に残すことには意味があると思うんです。その人がどんな風に生きて、なにを大切にしてきたのか。人間はすぐに忘れてしまう生き物だけど、形に残しておけば思い出すことができます。

有壁の愛おしい日常を、この先も残したいと思ったまいちゃんの思いが、この「ありかべぐらし」には詰まっています。そしてそれは未来にもつながっていくのだと思います。

有壁に住む方々のあたたかさ、残したいと思える風景を、想いを込めて写真を撮らせてもらいました。これを読んだあなたにも、心に残る何かがあったならとても嬉しいです。

あしかが ふみか

暮らすことで見えた、あたたかさ

今回作成していく中で「やっぱり有壁のここ好きだな」というポイントをたくさん感じることができました。

2020年12月に横浜市から移住してきたときは、移住して早々水道管が凍結したり、沢山の雪かきから生活がスタートしました。縁もゆかりも無い地域で、こうして21歳～24歳までの3年間を過ごせたのは、関わってくれた地域の方、そしてあたたかい有壁の雰囲気があったからこそだと思います。ありのままの有壁の日常を切り取らせて頂き、誠にありがとうございました。また、撮影してくれた足利さん、何度も有壁に来て頂き、どうもありがとうございました。

私が3年間見ていた景色を、これを読んでくれた皆様にも伝わると嬉しいです。

さとう まい



ありかべぐらし

発行日 / 2023年12月

作成者 / 栗原市地域おこし協力隊
佐藤 真生

企画・執筆 佐藤 真生

写真・デザイン 足利 文香